

学会について

学会誌編集委員長 中村豊久

1. 学会の役割は何か

学会の主な役割を3点上げますと

- ① 新たな学術的な知見の論文・報告
 - ② 会員相互の研鑽の機関
 - ③ 情報の提供
- です。
- ①については、工高教員が多いことから主に工高教育関係の専門的な学会としては唯一の学会になります。
- ②、③については、何処の学会も同じです。

2. 当編集委員会の基本的な姿勢

多くの工業高校の先生方は、工学・科学系論文を書いた経験はあっても、教育論文を書いた経験が少ないと思われるので、採択・非採択という視点だけでなく、内容的に優れたものがあれば、丁寧に査読し、論文としての体裁が整うようにアドバイス・指摘してきました。とは言え、いい加減な学会誌にたくありません。査読は厳しくします。「暖かく、かつ、厳しく。」が当編集委員会の基本方針です。

3. 最近の掲載結果

この12年間の掲載を分類別に記しますと、①情報系16報、②キャリア系7報、③機械・電気系5報、④課題研究系3報、⑤工業数理系2報、⑥その他10報でした。その結果を図1に示しました。この結果、最も多かったのは情報系で16%、2番目に多いのがキャリア系で7%、3番目が機械・電機系で5%となっております。

更に、年度別の変遷を図2に示します。この図から判ることは、①の情報系は2003年から多くなり、2011年以降は零になりました。すなわち、工高

における情報教育の開発は2011年でほぼ終了した事を示しており、学会誌と使命を果たして来ました。

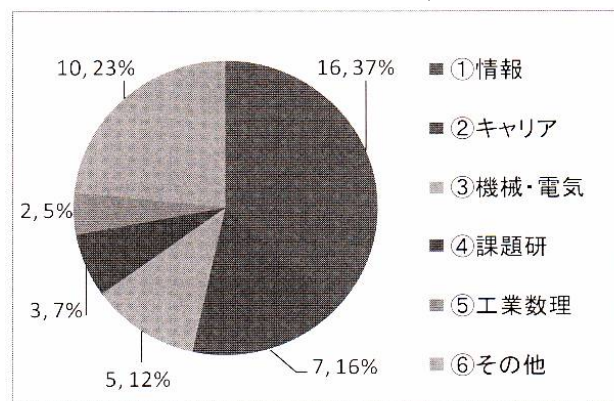


図-1 最近12年間の分類別掲載割合

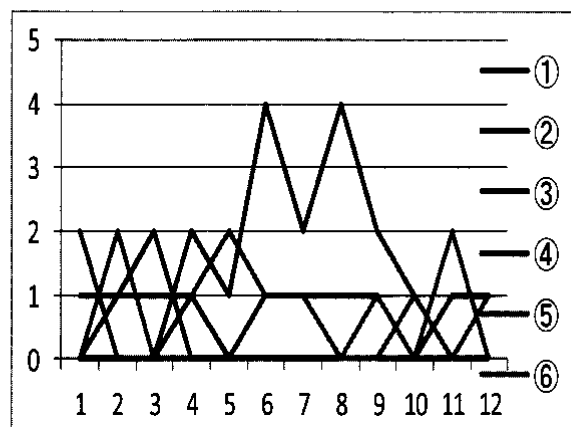


図-2 年度別、分類別掲載数

注：縦軸が掲載数、横軸が年度で、1が2001年、2が2002年を示し、①、②等の数字は分類別番号を示す。

4. 今後の課題と将来展望

学会としての評価は、掲載数と内容になります。今まで掲載数が少なかったのは致命的でした。今後、工高関係の論文は当学会誌を見れば良いと言う評価を得るまで高めて行きたいと考えております。教育系以外の論文でも査読は、その筋の権威者に依頼してきました。是非、研究成果を投稿してくださいようお願い申し上げます。

子どもたちの瞳の輝きに魅せられて ～ネパール教育視察団の試み～

日本工業教育経営研究会 海外交流特別委員会

1 はじめに

工業技術教育に関する研究の振興と実践的工業技術者の育成を目指す本会に、教職員にこそ広き視野を備えよとの願いが込められた海外交流特別委員会がある。

1998年夏に、ドイツの家具工房やジーメンス工場、ミュヘン工科大学を訪ねマスターの実際を見較べる貴重な機会を得た。フランスとドイツの教育委員会の空気感の違いや、カールスルーエ工科大学のインターンシップ制度は示唆に富み、後々、教育改革の流れを理解するのに大変役立った。チューリッヒのペスタロッツ記念館では、粗末な部屋の壁に手を当てて教育の営みがどれほど大切であるのか心魂に刻んだ一時が忘れられない。

この他にも、世界的なブランドを確立しているイタリアや産業革命を経たイギリスの教育視察など、時宜を得た活動を展開しているが、本報告では20年近くに渡る教育支援を続けてきたネパールでの活動について、各年度の報告から抜粋して取り上げてみたい。

2 ネパール教育視察のはじまり

神秘の国とも言われたネパールに第1回(1997.12)の軌跡を残した26名は、カトマンズ内のパタン市にあるクンプスワ技術学校や、国立トリビュバン大学工学部、家具工場などを見学した。50年以上も前の日本に立ち戻ったかのような街や村に技術教育の差異を上げるまでもなかったが、異口同音に子どもたちの瞳に惹かれたことが報告に記されている。

団長の小林一也先生(拓殖大学名誉教授)は「18年前、縁あってネパールに遊び、ネパールの子供たちの学びの悪条件の中で、その人間らしい愛の本能(人間的自然)に向かう目の輝きに出会い、その瞳の美しさに驚いた。日本の子供たちは、ネパールの子供たちとは



「将来の夢は？」の問いに元気な返事が戻ってくる

逆に、学びの条件は良いのであるが、愛に向かう目の輝きは誠に弱く、そのネパールと日本の差にびっくりした。そして、『この差は、教育研究の対象になり得る』と思った。」(第18回ネパール教育視察報告)と活動の原点を示されている。

首都カトマンズは、標高約1,300メートルの盆地状の都市である。王制から共和国制への変動で、地方から流入した人口は百万人に膨れあがったともいわれている。地下水の枯渇や環境問題に加え日に何度も停電がある。しかし、朝夕に大雪山の頂きが顔を出す光景には、人知を越えた威厳があり、街のいたるところに祀られた神々や寺院に祈りを向ける人々の姿は敬虔で美しい。

2013年の暮れ、カトマンズ盆地の東端に位置するドリケルの山村に、村民が熱望していた高等部の新校舎が完成した。多くの方々に支えられた20年を越える教育支援がようやく実を結んだのである。

3 ガネッシュ小学校

ガネッシュ小学校(Ganesh Lower Secondary School)は、パンチャカル村で2番目に古く1951年に創立された。校舎は、ドリケルの街道から20分程山道を歩いた小高い丘の上にある。信じがたいほどの高低差を段々畑が連なり

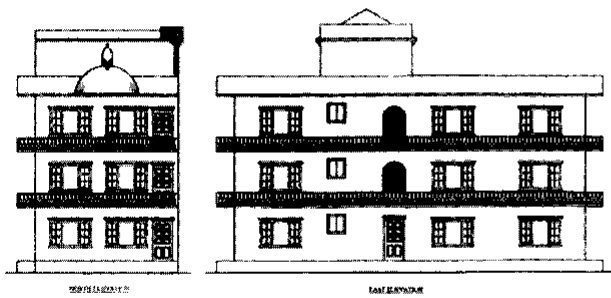
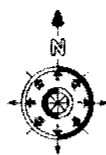


ガネッシュ小調印式 小林先生(中央左)と堀川先生(同右)
ヒマラヤの白い峰々が出迎えてくれる。

当時の様子を石坂政俊氏は「ネパールでは施設整備に教育予算が付かないためレンガと泥づくりの校舎は1959年の創立以来、修復出来ず、スレート張の屋根だけの仮校舎、机、椅子も不足し土間での勉強、教科書も全員に行き渡らない教育環境の中で眼を爛々と輝かせての授業であった。」と記している。

'95年12月(第4回, 34名参加), ガネッシュ小学校再建4ヵ年計画が始まった。そのときの様子を毛利昭先生(元全国工業高長協会事務局)が次のように記している。「本会は、日本とネパールの高校生の交流を目指して事業を展開する予定であったが、ネパール国全体の教育力の底上げの必要性を痛感し、カトマンズ郊外パンチャカール村のガネッシュ小学校建設に着手して来た事は周知の通りである。1995年12月に小学校建設に関する調印式が行われ、本格的な支援活動が開始さ

OPENING SCHEDULE	
1995.12.18	調印式
1996.1.15	基礎工事完了
1996.2.15	1階躯体完成
1996.3.15	2階躯体完成
1996.4.15	外装工事完了
1996.5.15	完成式典

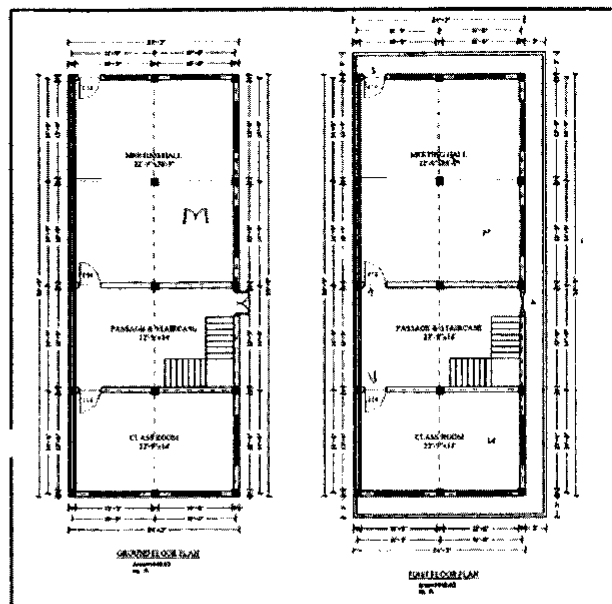


高等部新校舎立面図(当初案)



高等部新校舎 珍しい地鎮祭の一コマ

れたのである。晴天の下に行われた調印式に私も参加させて頂いた。当時団長の小林一也 拓殖大学教授と堀川忠義委員長(故人)による調印式は感動と共に今でも鮮明に覚えている。その時、石坂ご夫妻の骨折りで、桜の苗木20本が運び込まれ、学校周辺の敷地に植樹が行われた。」(同第18回報告)。焼成度の低い煉瓦造りの4教室しかない小学校の庭先に小さな椅子が並べられ、たくさん子どもと村人たちが見守る中に執り行われた。続く3年間に2教室ずつ増築を支援した。'99年12月には、「緑と教育と技術」基金(事務局:山本将英氏)により新校舎3棟、トイレ、職員室(図書館を含む)、水道設備が完成し、この年に完成式典が盛大に行われた。同時に、中学部が開校して約500名規模の学校と



高等部新校舎1・2階平面図(当初案)

なり現在に至っている。

'07年12月、ガネッシュ小学校中学校長より高等部の増設とグラウンドの整備依頼があり、審議の上、子どもたちや親の要望が強い高等部の校舎建設を決定した。'08年12月高等部設置に向けた具体案が示され、群馬県立高崎工業高等学校の中曽根康先生が現場測量を実施した。

ガネッシュ小学校中学校は'09年2月に政府へ高等部設置の申請を行い、同年に新校舎の建設に着手し、約3か年の予定で各方面に支援の依頼を開始した。(第19回報告、石坂敦子氏)

4 高等部建設を目指して

2009年5月、政府に高等部設置の申請が受理され、校名はShree Ganesh Secondary Schoolとなった。8年生の教室は校舎がないため正門前の民家の1階を借りて授業を行った。'10年度は、9年生用の教室を借り受けなければならない高等部校舎の建築が急がれた。'09年12月、ガネッシュ中学校において、同校教職員やPTA、第17回ネパール教育視察者の立会いのもとで代表委員を決定した。

組織構成は、村開発委員会(Panchkhal Village Development Committee; VDC)代表 Rajendra Prasad Sapkota 氏、ガネッシュ校代表 Shree Ganesh Secondary School 校長 Balaram Sapkota 氏、日本工業教育経営研究会海外交流特別委員会代表 石坂政俊氏、ガネッシュ校支援基金事務長 Ganesh Man Lama 氏であった。

立ち会った後藤信行氏は「この18年間継続して支援しているガネッシュ小中学校を訪問すると、どこで摘んでくるのかいつものように子供たちが花のレイをいくつも首にかけて迎えてくれた。数年前から、後期中等教育(高等学校にあたる)のための9~10年生用校舎建設が計画されてきており、今回の訪問ではその地鎮祭に出席することになっていた。日本と同様、建設予定地で厳かに地鎮祭が執り行われた。1, 2年後には立派な校舎が完成



精一杯の歓迎に心温まる一時

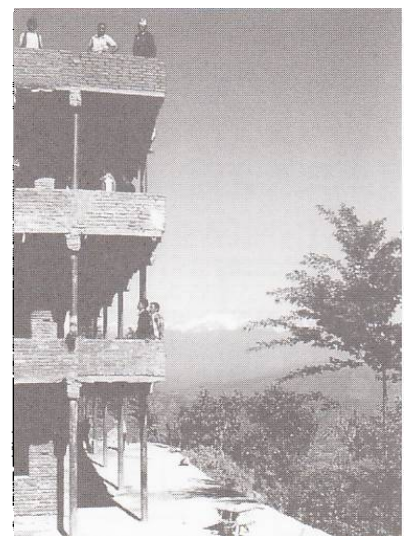
しているものと思う。これで子供たちは速くの学校までバスで通学する必要がなくなる。」と記している。

5 建設の過程で

高等部校舎は、鉄筋コンクリート4階建てで、'12年12月に校舎外装が完成した。内装工事や机、椅子などの調整を行い、'13年12月には学校に引渡すことが出来た。高等部校舎の完成により、高等部の上にさらに2年制のカレッジを設ける予定である。10年生の全国統一卒業試験(SLC)の合格率も高くなり、合格者の高等教育の場が求められている。

しかし、ここまで順調にきたわけではない。建設現場に常駐する監理者を派遣する余裕はなく、ネパール語の「ビスターリ」は「ゆっくり」の意であるが、案の定、工事もビスターリ・ビスターリとなっていた。

「ガネッシュ校高等部校舎の建設は、ようやく階段が取り付けられ建物としての外装が整った。ネパールでは、今、建設ラッシュで資材の高騰、技術者不足で工事がなかなか進まない。ガネッシュ校はドリケルにあり、作業者は



右手にヒマラヤを望む建設中の校舎



完成引渡し式を迎えた新校舎の遠景(2013. 12. 28)

カトマンズと学校を往復するために作業時間が1日4時間程度でなかなか進行しない。支援金の多くが人件費で消えてゆく。又、5月を過ぎると雨季となり工事が止まる。平成25年6月までには完成させたいと考えている。しかし、こちらの思い通りにならない現状がある。」(石坂政俊氏)と、難しい場面が記されている。

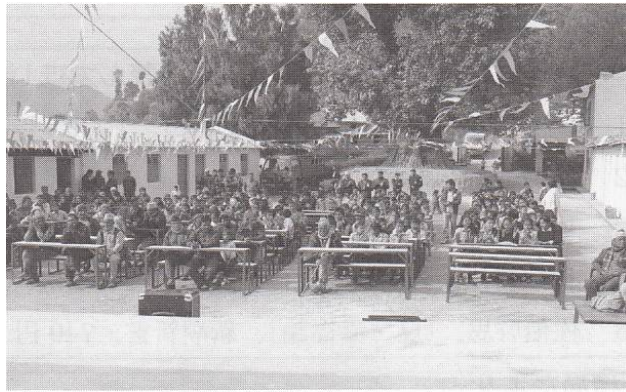
建築工事にも問題があった。近隣のコンクリート煉瓦造と同様に、柱は細く鉄筋の本数も少ない。狭小の校地のため崖を削って建てたことから構造耐力にも不安が生じ補強工事が追加され費用負担も増大した。

6 念願の新校舎が完成

2013年12月28日、前泊していた面々がドリケルに集合し山道を歩んだ。学校に至るこの道を石坂先生やコーディネーターのLAMAさんは何度通ったことであろう。遠くに、ヒマラヤの白き峰々も顔を出し、みんなの足取りも速まり息も弾んだ。ガネッシュ小学校のシンボルだった大きな菩提樹が見えてくると、校庭に張り巡らされた色とりどりの旗が風にはためき子どもたちの声が響いてき



アルミサッシが入り風雨でも授業ができる新教室 —23—



やっとここまでできたぞ！完成引渡し式の賑わい

た。

校庭にありったけの椅子が並べられ、子どもたちに加えて地域の方々もたくさん式典に参集した。神々への感謝の祈りが終わると、歓迎のあいさつ、合唱、ダンスと続く。新校舎は朝日に輝き、山の聖霊の使いと言われる風の神も、「レッサムフィリリ」の歌声に合わせて祝福してくれているようだった。

校名の「ガネッシュ」はヒンズー教の学芸の神の名でもある。物的な支援は一段落だが、校名に相応しい指導法の改善や教材の充実も課題である。ぜひ皆さんとともに現地を訪ね、ガネッシュ校の先生方と一緒にこれからを考えてみたいと思う。

7 おわりに

ある日、堀川先生から「アジア研究部のようなところから、ネパールに子どもたちとこられるようになるといいね…」とお話いただいた。'03年、図らずも「目指せスペシャリスト」の一環で、千葉県立市川工業高校の生徒たちとカトマンズに降り立ち、古都パタンの建築調査など5か年に渡り取り組むことができた。現地に同行した伊藤敏朗先生(現東京情報大学教授)は、天啓を受け現地で文化財保存やネパール文学作品の映画を制作し数々の賞に輝いている。幾度かネパールを訪れた方は、同様に大きな気づきを得たのではないだろうか。教育の原点をみるような本事業を支えてくださった多くの皆様に「ナマステ(あなたの中の尊きものを拝みます)」の言葉と、心からの感謝を申し上げます。

(文責 菊池貞介)

読んでほしい本

- 1 綱本武雄（絵）、加藤正文（文）、「工場は生きている」、かもがわ出版、2000 円
- 2 岡野雅行、「他人と違うことをしなければ生き残れない」、PHP、1000 円
- 3 本川達雄、「生物学的文明論」、新潮新書、740 円
- 4 田中耕治、鶴田清司、橋本美保、藤村宣之、「新しい時代の教育方法」、有斐閣アルマ、1800 円
- 5 佐伯啓思、「反・幸福論」、新潮新書、740 円

事務局だより

会報第47号では、日本工業教育経営研究会・日本工業技術教育学会の活動方策に対する指針が示されています。また、講演報告、PISA2012年調査国際結果の要約、支部報告、学会について、海外交流特別委員会報告等を掲載し、本研究会・学会の意義を全国に発信してまいりたいと考えています。

第24回工業教育全国研究大会は、平成26年7月12日（土曜）・13日（日曜）大阪電気通信大学寝屋川キャンパスで開催されます。工業教育の推進に向け一層の充実と研修が望まれます。

東日本大震災から4年目を迎えました。依然として復興の足音が聞こえない状況が続いています。「東日本の復興なくして工業教育の前進なし」とのスローガンを設けました。

我が国は、地震・津波の多発国といわれ、先人から「地震を感じたら身を守る」「津波と聞いたら欲を捨て逃げよ」と伝えられて来たのですが、東日本大震災では、2万人近くの方々が犠牲となりました。

4年がたちニュースでの報道も少なくなりました。復興がいかに難しいか。日常の「危機管理」がいかに大切であるかを再認識したいと考えています。仮設校舎が存在し、小・中学校の統合が進み、工業高校での実習施設・設備の復旧が遅れています。復興に向けた工業人材の不足を外国人労働者の導入との方向で進められています。日本の繁栄を考えた時、私たちは工業高校の存在と若い工業人の育成を推進しなければなりません。工業教育の前進なしで東日本の復興はありません。今でも、仙石線で不通箇所が有り、石巻線の女川駅は復旧していません。嵩上げ工事や登記手続き等があるとのことですが、工事車両、労働者の不足が原因です。復旧に向け、日本工業教育経営研究会・日本工業技術教育学会の力を結集してまいりたいと考えています。

平成26年度 支部大会開催予定（3月28日現在）

近畿支部 平成26年 5月24日（土）、12月13日（土）神戸村野工業高等学校

東北支部 平成26年11月29日（土）～30日（日） 山形県

関東支部 平成26年12月6日（土） 東京都 拓殖大学文京キャンパス

一般社団法人日本金型工業広報委員会より DVD「たい焼き同好会の型探し（金型業界紹介ビデオ）」～Let 's go to "KANAGATA" world～ が事務局に送付されています。ご希望される場合は事務局にご連絡ください。

[口座番号]

三井住友銀行 高田馬場支店 普通口座 3566025

ゆうちょ銀行 00130-2-755590

いずれも 「日本工業教育経営研究会」宛

口座振込による会費納入の場合は、各金融機関の受領書をもって領収書に代えさせていただきます。

[発行者]

日本工業教育経営研究会 会長 櫻井和雄
日本工業技術教育学会 会長 岩本宗治
事務局

〒230-0016 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾
北台 19-2-A-305

TEL/FAX 045-575-3828